
文集用 Lost Heaven @42 **高岩悠**

鎌学 文芸部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文集用 Lost Heaven @42 高岩悠

【Nコード】

N1356H

【作者名】

鎌学 文芸部

【あらすじ】

クローン誕生により持ち上がった「箱庭計画」。その箱庭の中で
生きているクローンたちの物語

前編

「ついに世界初のクローン人間の開発に成功か？」

この記事が紙面の上を暴れまわったのは今からもう10年も前の話である。

クローン人間開発最大の問題、それは「人が人を作り出していいはずが無い」という人々の根本とでも言うべき概念であった。しかし時代が進むに連れて人々は進歩し、さらなる力を手に入れてしまった。

巨大な力を蓄えてゆくうちにだんだんと人々はある錯覚を起こし始めた。

「自分たちは神にも等しい力を手に入れたのではないのか」、「神にも等しい我々なら人を作り出してもいいのではないか」と。

そんな時代の流れのなか、ある科学団体がクローン人間の作製に踏み切った。そして彼らはいとも簡単にクローン人間を作り出してしまったのだ。

最初の頃は人々の良心が働き、反対意見もあつたものの、そのうちに人々の中の罪意識も薄れていき、だんだんとそんな意見も少数派となつていった。クローン人間の作り方はいたつて簡単。元となる細胞を、分裂させるための培養機に入れて1年ほど放っておくだけだ。ただこれだけのことでクローン人間は出来上がってしまう。

培養機から取り出されたクローン人間たちは生まれた頃から洗脳に近い教育を受け、何の疑問も持つことなくオリジナルの人間に従うように調整された。

こうして完璧に調整されオリジナルと変わらない能力を手に入れたように見えた彼らだったが、唯一オリジナルの人間と違うところが

あった。彼らがオリジナルと違うところ、それは彼らの特異な成長であった。

彼らは生まれてから5年程でオリジナルの20歳に相当する体と頭を得る。そしてその後はその容姿と頭を持続したまま15年ほど生きたのち息絶える。

クローンの寿命は長くても20年が限度であり、オリジナルよりも遙かに短命なのだ。

この致命的なバグがどこから出てきたかを科学者たちは必死に探し出そうとした。しかし結局見つけることはできなかった。

それもそのはずなのである。そもそも膨大な量の計算式から間違いを見つけ出すという作業はサハラ砂漠に落とした1カラットのダイヤを1人で見つけるのと同じようなものだ。

結局科学者たちはこの致命的な欠陥を取り除くことはできなかった。「なくなったら補充すればいいのではないか？」という考えも出たがそれは出来なかった。いくらクローンだからといって全くコストがかからないわけではない。コストがかかるという以上無尽蔵に作り出せるわけではない。無限に作り出すことが不可能な彼らを安定した労働力にすることはできない。

一人のクローンの値段がそのクローンが働いて発生する値段より下回った場合それは作れば作るほど赤字ということだ。実際一人の値段が3000万円で、彼らが寿命のうちに生産することが出来るのはせいぜい1500万円程度である。

この欠陥を克服できないままクローンたちは無用の長物になってしまふと思われたとき、科学者たちの頭の中にある案が浮かんだ。それは「クローンの寿命が短いのならそれを利用してしまえばいい」という案だった。

寿命が短く肉体的にも精神的にも若いうちに死んでしまふというなら、考え方も若いうちに死んでゆくことである。つまり彼らには年老いて考えが保守的になることが無いのだ。

たとえばオリジナルの人間の世界で、上に居座っているのはたいて

い考えを変えようとしないう頑固な老人だ。彼らは今まで自分がうまくいつてきた経験があるから考えを変えようとしないうわけだが、それでは刻一刻と変わる時代の流れにはついて行けない。

しかしクローンにはそれが無い。彼らは、若いうちに、考えが進歩的なうちに死んでしまう。そのため寿命の間分考え方は進歩し続け、考えが止まり始めた頃に死に世代交代がなされる。つまり思想的な進化が止まることが彼らには無いのだ。

そこで科学者たちはクローンのこの性質を元に計画を練り上げた。そうして出来上がったのが「箱庭計画」だ。

「箱庭計画」。それはクローン人間たちを縮小。そしてオリジナルの世界をそのまま小さくしたような大きな箱の中彼らを入れて彼らの動きを観察し、そして思想的進化を遂げた彼らの世界の制度をオリジナルの世界に取り入れようというものであった。

この計画は直ちに実行に移された。

世界各地から様々な人種や民族の遺伝子が集められそれぞれのクローンが生み出された。

そうして作り出された彼らは言語を統一され、今の地球と全く同じ環境の箱の中に入れられた。

クローンが入れられた箱はオリジナル側からは見えるがクローン側からは見えないような仕様になっている。

つまり箱中のクローンはただオリジナルの人間の為に生かされているだけなのである。

箱の中のクローン達の世界にあるのはどこまでも続いて見えるまやかしの世界と偽りの自由だけだ。

そして現在「箱庭計画」実行から10年が経とうとしていた…

(本編)

「キーンコーンカーンコーン……」

聞きなれた学校のチャイムの音。もう聞きたくないと思っていたが、これで当分聞けないと思うと少し感慨深いものがあるような気がする。

今日は7月14日。今日から夏休が始まるわけなのだが……

「はあ…することもないし家に帰るか」

全くすることが思いつかないので、さっさと家に帰ろうと家路に着こうとしたとき、突然背中をものすごい勢いで押された。

「うわあっ!」

俺は思わず叫びながら、バランスを崩し道路に転んでしまった。バランスを立て直そうとすると後ろから声が掛けられた。

「やっほー!!」

振り返ってみると案の定すぎる奴がそこにいた。

「ねえねえ? どうしたの浮かない顔しちゃってさ?」

「やっぱりお前か……」

「やっぱりとはなによ! せつかく声かけてあげたのに」

「遙…さっきのは声じゃなくて完全に手だったぞ」

「なに言ってるんによ! 蓮ってばこうでもしないと全然テンション上げてくれないじゃん」

「別にそんなことないと思うんだけどな……」

「そんなことあるわよ…蓮って一人できるときってものすごく暗いわよ……」

「そついうもんかな」

「そつよ。大体何であんたは自分で気付いてないのよ!! 自分のことってのは自分が一番……」

なんだかヒートアップしているので遙は放っておくことにしよう。ついでに俺の名前は

「澤村 蓮」。どこにでもいる平凡な高校生だ。で、いまだにヒ-

トアップし続けているのが俺の幼馴染の「結城 遥」。小中高と全く同じ学校に通っているが、遥とはなんだかんだで幼稚園に入る前からの腐れ縁だ。

「考えてみれば長いもんだよな……」

「??? なに突然訳わかんないこと言ってるのよ……私の話ちゃんと聞いてた?」

「聞いてたよ。俺のテンションが低いつて話だろ?」

「あんた何分前の話を聞いてたのよ……」

「え……ああ……ごめん」

「はあ……まったくそんなだから高校はいつても女の子の噂が立たないのよ」

「それは関係ないだろ!! こういう感じを好きになってくれる女の子だつて……」

「いるんじゃないか? と言おうとしたその時背後から突然声をかけられた。」

「いや、そういうのはあんまりないと思うけどな。」

「???」

突然失礼な返答が返ってきたので後ろを振り返るとそこにはよくみた顔の男が立っていた。

「おお! 大樹じゃん!!」

「二人でまた痴話げんかですか? 仲のいいことで」

「ちよつ……大樹なに言ってるのよ!」

「なんなんでしょうねえ?」

「あんなねえ……」

バキッ!!……ドカツ!!

あーあ……大樹……御愁傷様です。

ついでに今、遥に殴られてるのはクラスメイトの「木村 大樹」だ。見ての通りのちゃんぽらんぽらんなやつで基本的に一言多かつたりする。

「痛いっつの遥……!」

「うるさい! あんたが悪いんでしょ……!」

「痛っ！俺はお前らが話しやすくなったらな、と思って言ったのに」

「逆に話しにくくなったわよ！！」

「そんなことないだろ！大体お前のことだから、まだ蓮にあの事言っただろ」

「うっ…そ、それは……」

「なんだ凶星か…」

「これから言おうと思っただのよ！！」

「本当かいな？」

「本当よ！！」

「ねえさつきから二人で何話してるの？」

何だか二人の会話から完全に置いてきぼりにされていたのでなんとなく聞いてみた。

「うっ…」

「ほら遙、さつきと話しちまえ」

「うー……」

「何？どうしたの遙」

「…あのね蓮、今日って何の日か覚えてる？」

俺は少し頭をひねってみたが特に何も浮かんでこなかったののでつい当たり前のことを答えてしまった。

「夏休みの始まりの日だろ」

そういつては遙のほうを見るとそこにはなぜか怒った顔の遙がいた。

「…他には？」

「えっと…始業式まであと一ヶ月の日？」

「…ふっ、蓮はそんなに死にたいわけ？」

「えっ！？何でそうなるの！！」

自分が飲み込めず必至に今日が何の日か思い出そうとしているが、全然思い出せない。そうしているうちにも遙の顔がどんどん怒りに染まっていく。

「えーっと、えーっと…」

こっちが必至に考えてるっていうのに大樹が後ろで大爆笑している。と、その時突然頭の中を電流が走った。

「そうだ思い出した！ 今日で遙の誕生日だ！！」

目の前の遙が一瞬驚いたような顔をした後にうれしそうな顔をしてくれた。

「…か大樹は残念そうな顔をするな。」

「蓮のくせに良く思い出したわね」

「そりゃあ一応幼馴染の誕生日だしね」

「…うれしい事言ってくれるじゃないの。」

「でもそれがどうしたの？」

「いやそのね…暇だったらでいいのよ、暇だったらで。」

「うん」

「今日この後、私の家に来て誕生日会でも…しない？」

そういうと遙は顔を赤くして俯いてしまった。

「何だそんなことか」

「そんなこととは何よ！ で、来るの来ないの？」

「そりゃ行くよ。特にすることも無いしね」

また遙がうれしそうな顔に戻った。

「やっぱり遙はこうでなくちゃね」

「じゃあこの後着替えて私の家に集合ね」

「了解」

約束をして家路に着き蓮が見えなくなったところで私は大樹に話しかけた

「さっきはありがとうね」

「どうしたんだいきなり？」

「私たちが話しやすくしてくれたでしょ」

「そんなどうでもいいこと気にするな」

「どうでもよくなんか無いわよ…大樹が間に入ってくれなかったら私絶対蓮を誘えなかった」

「まあそういうもんなのかねえ…」

私が大樹に、蓮が好きだということがばれたのはだいたい3ヶ月前ぐらいの話だ。

その日私は蓮に自分の気持ちを伝えようとしていた。

携帯があるこのご時勢にラブレターと言うべ々な方式だったが素直な思いを伝えるならこれが一番だと思った。

放課後私はそつと蓮の机にラブレターを入れた。

しかしそこで私は、まさか自分だけはするまいと思っていたラブレターの入れ違いをってしまったのだ。

そしてその入れ間違えた先が大樹の机だったというわけだ。

「そういうもんよ…」

「ふーん。まあこの調子で本番もがんばれよ！」

私は本番のことを考えると恥ずかしくてただ頷くことしか出来なかった。

「お誕生日おめでとう！」

「ありがとうねみんな」

「みんなと言っても二人だけだけどな…」

「別にいいじゃないの大樹。三人だけでも面白いんだから。」

「それもそうだよね」

実際に思ったので同意しておいた。

「はあ…それにしても最近では本当に時間が経つのが早いわよね」

「なに年寄り臭いこと言ってるんだ遙？」

「別にそんなこと無いでしょ！？」

「いやそんなことあると思うけどな」

「大樹は何でそういうことしか言えないのよ…私が本当にそう思ったんだから別にいいでしょ？」

「でも遙、その発言は本当にオヤジくさいよ？」

「蓮まで何言ってるのよ！？」

凄く意外そうな顔で俺の事を見てくる

「やっぱり年長者の言うことは違うなあ…なあ蓮」

「年長者っていつてもほんの一週間じゃないの！？」

「その一週間の差が大きいんじゃないですかあ？」

ブチ…

またなにかが切れた音がしたと思ったたらもうすでに大樹の姿は俺の視界から消えうせ、遙が後方に吹き飛ばされていた。

「たかが一週間でしょ！？ だいたい私だってまだぴちぴちの4歳よ！…！」

「…ぴちぴちの4歳だって」

と、大樹が言ったかと思うと即座に遙の回し蹴りが大樹の腹に命中し、大樹がたおれてしまった。

「おい大樹大丈夫か？ まあ自業自得なんだけど」

「まあ…なんとかな。それより俺はのどが渴いたから下に言って飲み物を飲んでくるよ」

そういうと何か遙とアイコンタクトをとり下の階へ行ってしまった。いったいどうしたんだろう。

そして遙のほうを向くと遙と目があった。

遙は何かい言いたげな目をしている

「どうしたの遙？」

「…あのね蓮、少し大切な話があるんだ。」

「なに？ どうしたのいきなりかしこまって？」

「……あのね、私ずっと前から…蓮のことが…」
「成功じゃあああ!!!!!!」

遙が何かを言おうとした時、突然下の階から叫び声が聞こえてきた。遙が言おうとしていたことは叫び声に消されて良く聞き取れなかった。

「今のつてもしかして遙のおじいちゃん？」

「そうだと思うけど…どうしたんだろ」

「またいつもの研究？」

そういつて遙のほうを見ると凄く悔しそうな顔をして唇をかんでいた。そんなに身内の失態が恥ずかしいのだろうか。

「…多分」

遙はそれだけしか答えなかった。

遙のおじいさんの東郷源十郎といえばこの辺りではかなり名の知れた変人だ。

その昔はとある大学で研究をしていたらしいのだが、違法な実験をしたため大学を追放。それでも自宅にこもり隠れて実験を続けていたらしいのだが噂はかなり立っていた。

訳の分からないアンテナを立てていたり、一日中家の中から変な音がしていれば変な噂の一つや二もたつはずである。

「とりあえず見に行ってみようよ」

「そうね」

下の階で合流した大樹と三人で地下への階段を下りていく。そうして行くの連につれてだんだんと下からの変な音が大きくなっていく。電子音の様に聞こえる。

ようやく下につくと奇妙な装置がまず目に入ってきた。次に目にはいったのは15歳ぐらいの人だった

「やっぱりおじいちゃんだったのね…」

「おお、遙じゃないか!!!」

「おお…じゃないわよ! どうしたのよおじいちゃん？」

「そうじゃ…そのことじゃよ!!! どうとう捕まえたんじゃよ!!!」

「何を捕まえたのよ？」

東郷さんはかなり興奮しているのか手をばたばたと振り回している。
「電波じゃよ、デ・ン・パ！」

「何の電波よ？ まさかまた法律に引っかかるようなことしてるんじゃないでしょうね！？」

「法律どころか世界をひっくり返すかもしれんのじゃぞ！」

「どういう意味よ？」

「それはな……………」

それから東郷さんが話してくれたことを要約するとだいたいこんな感じだ。

この世界は誰かによって作られたものであり最近作られた可能性が高いという。

東郷さんは大学の頃からこの研究を続けていたらしい。

大学に入った当時東郷さんは通信関連の学部に所属していて日頃から電波の研究をしていたそうだった。

そんなとき、東郷さんはある電波を捕まえた。見たこともないような複雑な電波で、そのときは設備不足のためにすぐに捕まえられなくなってしまうたそうだった。

その後、大学から追放処分を受けながらも機械に改良を重ねついに今日その電波を捕まえたのだそうだった。

そして捕まえた電波を解析してみると、なんとそれは全く違う世界から来たものだったのだ。

しかもおかしなことにその電波の出所は自分たちの頭の上、わずか20キロメートルだったのだ。

このことから考えられるのは、自分たちは何かに作られ、そして監視されているということである。

「……………」というわけじゃ

しばらく皆、東郷さんが何を言っているのか理解しきれず困惑顔だったが、しばらくすると遥が口を開いた。

「それって誰かに生かされてるって事？」

「まあ言い方を変えればそうなるかものお…」

「誰かに監視されてるって…それって本当なんですか東郷さん？」
「言いようの無い怒りが心の底からこみ上げてくる。もしそれが本当なら許すことは出来ない」

「言い切れることは出来ないがその可能性は高いのお」

「何とかして確かめる方法は無いのおじいちゃん？」

「ふっふっふ…遥ならそう言うと思ったわい」

「そういうと何やら内ポケットから赤いボタンを取り出し始めた。」

「こんなこともあるうかとしっかり遥に誕生日プレゼントを用意してあつたのじゃー!!」

そして東郷さんは自分の手にある赤いボタンを押した。すると突然目の前の床が開き始めた。

「おい、じいさん何だよこれ!？」

「まあ見ておれ」

そういつてるうちに見る見る間に床が開き、そしてその下から流線型の銀色の物体が出てきた。

「何よこれ？」

「ロケットという物じゃ」

「ロケット？」

「そうロケットじゃ。こいつは垂直方向に空を駆け上るための乗り物じゃ」

「それってどういう意味があるんだよじいさん？」

東郷さんが少し呆れ顔になった

「この乗り物にに乗れば上空20キロメートル…つまり問題の電波の発生地点までひとつ飛びで行けるのじゃ!! どうじゃ気の利いた誕生日プレゼントじゃろ？」

「東郷さん凄いい…」

俺はついついそういつてしまった。

「そうじゃろ？ 早速乗ってみるかい？」

「ダメよ蓮！ 危ないじゃない!!」

「危ないことはないぞ。機体にはチタンを使い、そして外に何が待ち構えていてもいいように光学迷彩まで備えておるのじゃぞ？」

「そんな設備まで…やっぱり行ってみようよ遙？」

「…でも危ないじゃない」

「確かに危ないかも知れないけど遙はこのままで許せるの？ 誰かに監視されてるかもしれないこんな生活が!？」

「……」

「それにもし本当に監視されてるんらいつ何をされるか分からないことだよ？」

「それには俺も賛成だな。どっちにしろこのままじゃ危ないかもしれないしな…」

「大樹まで…」

「そうだよ遙。俺たち以外にこのことを知っている人はいないし、言ったところで誰も信じてくれない。こんなのじゃますます危ないよ」

「そうだ、だから俺たちが行って証拠を取って来るんだ!!」

「そうだよ大樹！ だから遙も行ってみようよ」

「…そこまで言うなら付き合っつわよ……」

「さっすが遙！ なあ蓮？」

「やっぱりそれでこそ遙だよね！」

このとき俺たちはただ違う世界を見てみたいという好奇心にのみ突き動かされていた。

この行動の結果がどのような自体を招くのかを全く予想もしないままに。

「それじゃあ決まりじゃな」

そっついながら東郷さんが間に入ってきた。

「じゃあみんなロケットの中に入れてくれ」

そっついわれたので三人でロケットの中に入ってゆく。

「それではシートベルトをつけて席についてくれ。ロケットの操作はこちら側からする」

いわれた通りにして席に着いた

「それじゃあカウントダウン開始じゃー！」

そして東郷さんがスイッチを押すとカウントダウンが始まった。

「10・9・8…」

だんだんと緊張が高まってゆく。

「…3・2・1」

「0」

そう機械音が告げるのと同時に俺の体が凄いい勢いで座席に食い込んだ。機体が一気に上昇し、そこで俺は意識を失った。

くあとがき

どうも始めまして雀卓の騎士と申します。このたびはこの文集をお手にとっていただき本当にありがとうございます。

さて今回の作品のコンセプトですがズバリ「ベタ」です。

なんのひねりも無くドストレートに書いてみました。変にこるよりはかこうという書き口のほうが面白いのではないかと言う独断と偏見によるコンセプトです。

皆様はどうだったでしょうか？

蓮と遥のベタベタな会話には正直なところ作者自身も腹が立ちました。

とにかく「今時こんな恋愛はねえ！」という皆様からのツッコミがいただけただけなら幸いだと思っております。

今回は前編と言うこともありなかなか物語の確信には入り込めませんでした。後編ではしっかりと書いていきたいと思えます。

どうぞこれからも雀卓の騎士をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356h/>

文集用 Lost Heaven @42 高岩悠

2010年10月11日21時38分発行